

目的 老後の生活の充実は、単に老後の過ごし方の問題にとどまらない。中年期をいかに生きるかという課題とも関連がある。総理府調査によると近年、「自立できればあえて結婚しなくともよい」と考える女性が増加している。女の幸せは結婚にあるという伝統的な結婚観が崩れ、多様な生き方が可能になってきているが、結婚せずに働き続けた女性の場合に、仕事からの引退をどのように受けとめ、老後をどのように過ごしているのだろうか。独身の女性教師について定年退職と老後の生活の問題を検討した。

方法 1992年に福岡県内に居住する教員退職者に郵送調査を行い、55歳以上で退職し勤続30年以上の者を選びだした。そのなかで女性は、有配偶が163人、離死別が61人、未婚が44人いた。定年退職した44人の未婚の女性教師を分析の対象とした。

結果 4割の者が親族と同居し、一人で生活している者は6割である。年収200～300万円が4割を占め、400万円以上は2割しかない。しかし、9割以上の者が持ち家であり、定年後の生活に不安を感じていたという者は少ない。退職の受けとめ方や老後の生活について、有配偶の女性教師と比べて差異はあまりみられない。大多数の者が仕事からの引退を喪失感よりも解放感をもって受けとめ、達成感も強い。近所づきあいは乏しいが、友人とは親密な交際が続いている。趣味や旅行などに加えて学習や奉仕活動にも積極的である。日常生活で退屈や孤独を感じることはないが、将来の生活には不安を感じている。それも予感に反して強くはない。さらに、過去の人生に満足している者が多い。